



2005.10.1

『迦因小伝』に関する魯迅の誤解・下

.....樽本照雄 1

百年是非，如何評説？ 4 完 .....歐陽紫雪10

晩清小説作者掃描（肆） .....武 禧17

漢訳アラビアン・ナイト（13） .....樽本照雄20

『新編増補清末民初小説目録』の

『小説海』掲載作品正誤 .....杜 筆恩25

清末小説から29 清末小説研究資料叢書9として

樽本照雄著『清末小説研究論』を発行しました。

清末小説研究について、この30年間に発表した

文章を集めたものです。「文革」中の中国を

眺めながら日本で研究をどのように進めたか

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

『迦因小伝』に関する魯迅の誤解

漢訳ハガード小考 2 下

樽 本 照 雄

る。

陳曦鍾は、包天笑らの『迦因小伝』を見たのではない。彼が提出する資料は、いずれも阿英編『晩清小説叢鈔』小説戯曲研究巻に収録された複数の文献だ。

蟠溪子の「引言」、林紘の「《迦茵小伝》序」、金松岑の「論写情小説於新社会之關係」および前出寅半生の文章である。

以上の資料は、十分にはっきりと説明している。蟠溪子の翻訳した『迦因小伝』は、その内容はハガードの原書の上半分に相当するものではなく、下半分なのである。\*3

6 異論の提出 2

陳曦鍾が、その人だ。1985年にさかのぼる。樽本論文を読んでいるとは思われない。偶然の一致なのだろう。

彼は、魯迅の原文を引用し、新版『魯迅全集』の注釈を示しながら、魯迅が説明した「上半本」は誤記であると断言す

つぎに注目すべきは、范伯群が1994年におこなった指摘だ。陳曦鍾よりさらに約10年が経過している。本稿で問題にしている魯迅の当該文章を引用して下のよ

うに述べる。

魯迅の記述のなかにはいくつか不確かなところがある。1、楊、包が訳した『迦因小伝』は実は下冊である。「上冊」を訳しただけで「下冊を捜し当てることができず」というわけではない。2、楊、包ふたりの先訳者は、林琴南を「大いに罵った」わけではない。林訳に異議をとねえたのは金松岑であり、「大いに罵った」のは寅半生である。3、楊、包が訳した書名は『迦因小伝』であり、林訳は「因」に草冠をほどこして『迦茵小伝』である。<sup>\*4</sup>

范伯群の指摘は正しい、と私には思える。

多くの資料が、包天笑らの『迦因小伝』は原書の下半分を翻訳したことを示す。なによりも翻訳の当事者、すなわち楊紫麟と包天笑のふたりともが、また、林紓もそのように証言しているのだ。だからこそ、樽本、陳曦鍾、范伯群とほぼ10年おきに、あわせて3名から異議が提出されることになったのだ。

しかし、それを疑う研究者がいる。

## 7 郭延礼の反論

郭延礼は、異議が出されていることを熟知している。そのうえで、楊紫麟、包天笑さらに林紓という翻訳の当事者の証言をすべて否定する。魯迅の書くとおりで正しい、と主張する。それも、中国近

代翻訳文学に関する本格的な研究書においてそう述べる。のちの研究者に与える影響が大きいと考えられる。

郭延礼が、翻訳家のひとりとして包天笑を取り上げるのは、妥当であるしまた当然のことだ。彼の最初の翻訳作品が『迦因小伝』であることをいって、つぎのように説明する。

郭延礼『中国近代翻訳文学概論』漢口・湖北教育出版社1998.3

『迦因小伝』(Joan Haste, 1895)は、イギリスのハガード(H. R. Haggard, 1856-1926<sup>ママ</sup>)の小説で、楊紫麟の口訳、包天笑の筆述になる。当時は原本の上冊をみつけただけだったため、上冊を訳出し、1901年に文明書局から出版した。425頁

ハガードの没年は1926年ではなく1925年の間違い。文明書局本は、1901年出版ではなく1903年だ。1901年は、該翻訳を『励学訳編』に連載しはじめた年である。

包天笑らの翻訳が「原本の上冊」であると書いているのは、郭延礼のうっかりミスではない。翻訳者の証言を含めた複数の資料に目を通したうえで、確信をもってそう断言する。当事者の発言を否定するだけの自信が郭延礼にはある。その証拠に、わざわざ注をほどこしてつぎのように述べている。

この事は、後に魯迅が「上海文藝の一瞥」のなかで、「しかし才子佳人

の本で、当時を一時震撼させた小説がさらに一冊が出版して、それこそが英語から翻訳された『迦茵小伝』(H.R.Haggard:Joan Haste)です。ただし、上半分しかなく、訳者のいうところによれば、もともとは古本の露店で入手して、とてもよいのだが、残念ながら下冊を捜し当てることができず、どうしようもない」といつている。最近、ある論者によれば、魯迅はたぶん記憶違いをしており、楊、包のふたりが訳したのは上冊ではなく、下冊だという。林紓は「迦茵<sup>ママ</sup>小伝・小引」で、包天笑は「釧影樓回憶録・訳小説的開始」で、惜しむらくは「その前半部を失う」(あるいは「ただ後半部があるだけ」ともいつてはいる。だが、林紓が訳した『迦茵小伝』を調べると、迦茵が妊娠し私生児を生む話はいずれも小説の後半部にある。迦茵が妊娠する文章は小説の第25章(全書は40章)にはじめて出現するのだ。これから見れば、蟠溪子、包天笑が訳した『迦茵<sup>ママ</sup>小伝』は前半部でなければならず、魯迅のいうのが正しい。遺憾ながら、私(注:郭延礼)は、楊、包二氏の訳本を見ることができていない。425頁

郭延礼の注に見える「ある論者」は誰を指しているのか。陳曦鍾なのだろうか。それよりも、郭延礼の直前に文章を発表した范伯群と考えたほうがいいかもしれない。どのみち、樽本の文章は目に入っ

ていないだろうと思う。批判をするばあいは、「ある論者」などと曖昧にせず実名を出してほしいと思う。研究の基本規則だ。

それはさておき、一般論であれば、たとえ当事者の言葉であろうと疑ってもかまわない。記憶違いをすることもあるからだ。例をあげよう。周作人が『アラビアン・ナイト』を漢訳する時にもとづいた原本は英国ニュウズ社本であった、と一貫して書いていた。しかし、それが間違いであることは事実が証明する。

だが、楊紫麟のばあいは、周作人が過去を回想して書いたのとは話が違う。漢訳本にそのまま記したことばなのだ。時間が経過しているわけではない。

当事者の証言を否定して郭延礼が拠ったというのが、林紓の『迦茵小伝』そのものだった。「迦茵が妊娠する文章は小説の第25章(全書は40章)にはじめて出現する」から包天笑らの漢訳は「前半部でなければならぬ」。論理がおかしいではないか。原書の後半部分が手元にあって、そこにジョーンの妊娠がでてくれば、その部分だけを削除すればいい話だ。「前半部でなければならぬ」理由など存在しない\*5。

## 8 関連する論文

『迦茵小伝』あるいは『迦茵小伝』を題名に使用している文章を読んでみる。包天笑らが入手した原書は上半分か下半分か。以上に述べた文献以外に言及しているものはないか。



『勸学訳編』第4冊

鄭逸梅は、主として包天笑の回想録によって1文を書いている。だから、原書の下半分しか入手できなかったことについて疑問を差しはさまない\*6。

翻訳をめぐる見解の相違が、包天笑と楊紫麟、および林紓らの有名人の名前とともに出現したことは述べた。いかにも鄭逸梅好みの逸話のはずだ、と私は感じる。だが、鄭逸梅はこれを採用していない。奇妙である。

林紓が包天笑らの連絡先が時報館であることを探しだして手紙を寄せた、と鄭逸梅はより詳しくのべる。また、数年後、包天笑が林紓に会ったとき、林はその時のことを話題にしたとも書いている(36頁)。包天笑らが林紓の漢訳を罵っていたとしたらあり得ることだろうか。これが

らしても、魯迅がというような事柄があったとは想像しにくい。読者である寅半生の反応を、林紓訳に対する前の訳者の抗議だと魯迅が誤解したのではなからうか。

鄒振環は、漢訳の原書がどうだったかについては興味がないらしく、何も説明しない\*7。

郭延礼は、彼の前出大著から『迦茵小伝』部分のみを引き抜いて、小文を公表している。それにも、次のように説明する。「1901年(光緒二十七年)蟠溪子(すなわち楊紫麟)と天笑生(すなわち包天笑)は、協力してハガードの小説 Joan Haste を翻訳し、題名を『迦因小伝』といった。しかし、この本は半分を訳しただけで、訳者はその下半分が欠けており、まず上半分を訳出するだけだと声明している」\*8

従来の主張をくりかえすばかりか、楊、包の証言をねじまげ、事実とは反対の「声明」にしている。それほどまでに確信を深めていることがわかる。

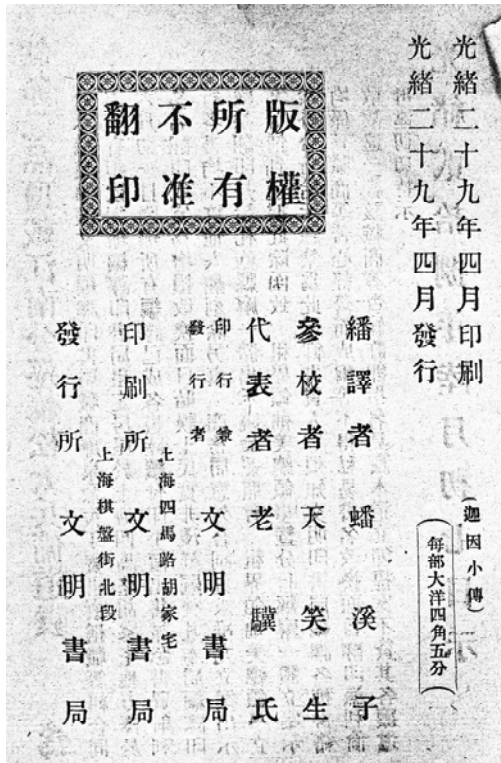
憶測に対しては、事実を示して証明する以外に方法はない。

## 9 包天笑らの『迦因小伝』

包天笑の回想でわかるように、漢訳の『迦因小伝』は、まず雑誌に連載された。

『迦因小伝』(蟠溪子、天笑生訳)『勸学訳編』第1-12冊 光緒二十七年二月十五日-壬寅正月十五日(1901.4.3-1902.2.22)

私は、木刻の該誌第4-12冊掲載分を見



文明書局版『迦因小伝』1903



たにすぎない。文章の途中でであろうが中断して次号につづける連載方法を採用している。英文原書は全40章に分けてあるが、包天笑らの漢訳は、章わけをしていない。原稿の全部を先に木刻にしておき、適当な分量、該誌のばあいにはほぼ3葉を基準に分載していく。第12冊を見れば連載を完了していないことがわかる。第1冊は未見だから原作者名があるのかどうか、翻訳者名がどう表記されているのかわからない。ただし、下に示す目録が当時の様子を伝えてくれている。原文のままを引用する。

徐維則「小説書録」

迦因小伝 励学訳編本 / 蟠溪子訳。

此書西名《迦因<sup>ママ</sup>嘉托来》。所訳係下半部，纏綿悱惻，甚可觀（顧補）\*9

珍しいと思うのは、こちらは初出の『励学訳編』に連載されていたものを指しているからだ。「下半部」と記述しているのは、雑誌連載の最初に単行本と同じ楊紫麟の説明があるからだろう。この記述によると、原作者と包天笑の名前は明示されていないらしい。

雑誌そのものが第12冊で停刊したのであれば、連載は完結しなかったということだ。単行本になってようやく包天笑らの訳業が明らかとなる。

### 迦因小傳

譯者蟠溪子曰。歲在庚子夏。某負篋來海上之三載。時以暑假。學堂中自教習學生。悉作休夏計。某家海上。輒以晚涼閑步。偶於冷攤得殘破西籍數種。索價一先令。購歸展讀。中有迦因書。司托來一種。譯言迦因小傳者。爲歐西小說家。惜殘缺其上。帙而郵書。歐美名都。思補其全。卒不可得。時我友天笑生。有事海上。權墨之暇。輒相過。從距離不百武。有公花園。期晤君。則相期園。陽鳥歸山。微風。淅暑。期天笑生不至。手迦因小傳。就坐林下。冷然誦之。則所謂澄汰其煩。縉淫。而與以灑疏。馳蕩乎。天笑生來。則促膝並坐。手講口譯。恆至電。魄列星。雲衣漏月。相將俱歸。迨秋來。小病。昕夕多閑。乃就原文。隨譯隨錄。得數十紙。適天笑生歸自金陵。道海上。携稿去。囑稍加刪補。焉。某既以譯筆淺陋。深滋不文。慙又念今日。需譯之急。而乃虛。光陰。消磨。精力於小說。家言不幾。令有識

迦因小傳

一

迦因小傳

二

者齒冷乎。亦以資茶話。視西俗。將附於豔麗。思想家之說。耳。既述其緣起。復當覓其全帙。以成完璧。然迦因之原委。以後度前。亦思過半。矣。可勿贅焉。

迦因別李文之次日。檢點行囊。將作遠遊計。擬明日十點鐘往附火車。籌畫既定。又歛眉凝思八分鐘。抽筆伸紙。疾書一函曰。

亨利足下。昨辱遣人視妾。感叙不可名狀。迦因頑軀無恙。幸勿繫念。所難堪者。林南先生之死。我亨利。此哀痛當難喻。解今者。妾將有遠行。告我亨利。必深詫怪。然值此青年。義應力食。故未預謀。足下。亦未告我姨母。足跡所至。初無定蹤。所可自信者。迦因之愛我亨利。會不稍衰。地老。天荒。無渝。此志耳。贈書數冊。攜共昕夕。置之行篋。伴我孤影。風前。展卷。如與我故人亨利。相對也。妾行矣。願亨利努力加餐。毋以妾爲念。

書畢。迦因持書。復默論一過。乃置信袋中。以舌銜封口者。再重書收信人住址。出投郵筒。途遇一少年。日衛廉者。現爲海關夫役。以兩手插衣袋。外披一掛。立某雜

『迦因小傳』蟠溪子(楊紫麟)翻訳、  
天笑生(包天笑)參校 上海・文明書  
局 光緒二十九年四月(1903)

原作者の名前は、書かれていない。もし原著の全文があったとすれば、省略する必要もないだろう。楊紫麟が入手したのは、やはり破れ本、すなわち不完全本だと考えていいのではないか。

本書に掲げられている包天笑「序」および蟠溪子「引言」のふたつとも、阿英の『晚清小説叢鈔』小説戯曲研究巻に収録されている。ただし、蟠溪子の文章は、翻訳本文の冒頭に組み込まれていて阿英のこのような「引言」の表示はない。

漢訳本文は、次のようにはじまる。

迦因別李文之次日。檢点行囊。將作遠遊計。擬明日十點鐘往附火車。籌

画既定。又歛眉凝思八分鐘。抽筆伸紙。疾書一函。(ジョンはレヴィンガーと分かれた翌日、荷物をしらべて遠出の準備をした。明日10時の列車で出かけることにして、計画が決まると、しばらく眉をひそめて思いを凝らし、筆をとり紙をだして手紙をすばやくしたためた) 2頁

ハガードの原文では第21章にあたる。あらかじめいっておくが、原著は、長編小説なのだからかなりの分量がある。魯迅が「それほど長くもない本」というのは、漢訳本を見ての印象ではないかと思う。

英文原作から該当する個所を引用する。

Two days after her visit to Mr.



商務印書館版林紓訳『迦茵小伝』2種

Levinger Joan began her simple preparations for departure, for it was her intention to leave Bradmouth by the ten o'clock train on the following morning. First, however, after much thought, she wrote this note to Henry: (レヴィンガー氏を訪問して2日後、ジョーンは出発のために簡単な準備をした。それは、彼女が翌朝10時の列車でブラッドマウスを去るという計画だったのだ。しかし、熟考したうえで、まず、彼女はヘンリーに次のような手紙を書いた) 214 頁\*10

英文原作と比較対照すれば、原文より

もやや複雑にして、といってもわずかに4文字だが、「眉をひそめて思いを凝らした(歛眉凝思)」と漢訳していることがわかる。こういう箇所が包天笑がつけ加えた彼なりの文章の修飾なのだろう。漢訳は、ほぼ原文通りになっていると考える。

念のために、同じ箇所について林紓らの漢訳も見ておこう。

『(言情小説) 迦茵小伝』2巻上下冊 (英) 哈葛得著 林紓、魏易訳 上海商務印書館 乙巳年二月(1905)/1914. 4再版 説部叢書初集第13編。奥付は哈葛徳。林訳小説叢書初集第3編も同版。

迦茵自調来文杰家後。二日中。均

俶装戒行。準以明日上午十句鐘。趁早車至倫敦。凝坐移時。遂作一詳贍之書予亨利。( ジョーンはレヴィンガーに面会してから2日のうちに旅装を整え、明日の午前10時に早い列車でロンドンへ行くことにした。しばらくじっと座ると、ついにヘンリーにあてて詳細な手紙を書いた ) 1頁

林紓らは、原作通りに章分けをして上記の部分も同じく第21章である。原文にはないロンドンが出てくるくらいで、こちらもほぼ原作を忠実に漢訳しているとわかる。

以上、包天笑らの『迦因小伝』は、原作の下半分からを漢訳したものだと確認できた。

## 10 結 論

魯迅の誤解だ間違いだ、と誤りを強調して見苦しい。もし、そう感じられたとしたら、もうしわけない。なるべく誤りの少ない記述をしたい、と私が考えているところから発している。魯迅の文章であろうと、不正確な箇所にてあうと言いいいたくなるとご了解いただきたい。

『ジョーン・ヘイスト』についての注釈を書いて本稿の締めくくりとする。

『ジョーン・ヘイスト Joan Haste』1895 英国八ガード Henry Rider Haggard ( 1856-1925 ) 作の長編小説。漢訳は2種類ある。楊紫麟が上海で原著の下半分だけの破れ本を入手した。原著者は不明のまま、包

天笑との共訳で『迦因小伝』と題した漢訳が、最初、木刻雑誌『励学訳編』第1-12冊( 1901-02 ) に連載された。雑誌の停刊で連載は中断する。原書の下半分のまま、1903年、上海・文明書局から出版され、当時、広く流行した。魯迅が、上半分だけの漢訳と説明するのは誤り。のち、林紓と魏易が全文を訳出した。書名を1字違いの『迦茵小伝』と名付け、1905年商務印書館から出版される。「説部叢書」および「林訳小説叢書」にも収録された。郭沫若が少年時代に読んで感銘を受けたというのは有名な話。主人公ジョーンが妊娠する箇所を翻訳すべきではなかった、と前の翻訳者が林紓をひどく罵ったという魯迅の紹介は、彼の誤解であろう。事実は、寅半生が2種類の漢訳を読んだ結果、林紓訳を罵ったというだけ。 ㊦

【附記】本稿は、2004、2005年度大阪経済大学特別研究費による研究成果の一部である。

### 【注】

- 3 ) 陳曦鍾「關於《迦茵小伝》的兩種訳本 訂正新版《魯迅全集》的一条注釈」『文献』第20輯1985.2。257頁。なお、陳曦鍾は、該文で楊紫麟が原著を『迦因喜司托来』と表記していることをとらえて、Haste を History と誤解したようだと書いている( 注2。258頁 )。楊紫麟がいくら学生だったとはいえそのような間違いをするか疑問だ。それでは英単語の基礎知識もないというのに等しい。漢訳をなしとげる学力もないことになるのではないか。私は、「喜司托来」の「来」



- が誤植なのではないかと疑う。
- 4) 范伯群「現代通俗文学的無冕之王 包天笑評伝」『現代通俗文学的無冕之王 包天笑』南京出版社1994.10。中国近代現代通俗作家評伝叢書之二。19-20頁。なお、范伯群「包天笑、周瘦鷗、徐卓呆の文学翻譯対小説創作之促進」(王宏志編『翻譯と創作 中国近代翻譯小説論』北京大学出版社2000.3。231頁)でもくりかえしている。范伯群主編『中国近代現代通俗文学史』下卷(南京・江蘇教育出版社2000.4)では、「該書据 Joan Hasfe<sup>ママ</sup>一書後半部訳出」(741頁)と書いている。
- 5) つぎの文献がある。沢本香子「本格的翻譯文学研究の出現 郭延礼『中国近代翻譯文学概論』について」『清末小説』第21号1998.12.1。樽本照雄『清末小説研究論』清末小説研究会2005.8.1所収
- 6) 鄭逸梅「《迦茵小伝》和《迦茵小伝》」『書報話旧』上海・学林出版社1983.8。『鄭逸梅選集』第1巻 哈爾濱・黒龍江人民出版社1991.5。疑問なく下半分だとする文献を以下にあげておく(網羅しているわけではない)。林薇「林紓伝」『林紓選集』(小説巻上)成都・四川人民出版社1985.12。319頁。陳平原『二十世紀中国小説史』第一巻(1897年-1916年)北京大学出版社1989.12。279頁。楊聯芬『晚清至五四:中国文学現代性的発生』北京大学出版社2003.11。104頁。葛桂録『中英文学關係編年史』上海三聯書店2004.9。122頁。ただし、『迦茵小伝』と誤る。
- 7) 鄒振環「《迦茵小伝》 近代中国一大外国暢銷書」『書林』1989年第4期(総第77期)1989.4.15。『影響中国近代社会の一百種訳作』北京・中国对外翻譯出版公司1996.1

- 8) 郭延礼「《迦茵小伝》所引起的風波」『自西徂東:先哲的文化之旅』長沙・湖南人民出版社2001.4。48頁
- 9) 徐維則「小説書録」『東西学書録』1899(阿英編『晚清文学叢鈔・小説戯曲研究巻』北京・中華書局1960.3上海第1次印刷/台湾・文豊出版公司(1989.4)影印本)/『増版東西学書録』光緒二十八年(1902)年十二月(王韜、顧燮光等編『近代訳書目』北京図書館出版社2003.10影印本)。532頁/増版はカッコ、句読点ナシ。291頁
- 10) H. Rider Haggard "Joan Haste" Longmans, Green, and Co. London and New York, 1895, Second Edition

## 『清末小説から』第78号

2005.7.1

- 『迦茵小伝』に関する魯迅の誤解・上  
 .....樽本照雄  
 『大共和日報附張』スクラップ...杜 筆恩  
 百年是非,如何評説? 3 .....歐陽縈雪  
 韓國所見清末民國通俗小説書目(初稿)  
 .....張 元卿  
 晚清小説作者掃描(參) .....武 禧  
 漢訳アラビアン・ナイト(12)  
 .....樽本照雄

『清末小説から』は研究会ウェブサイトのみの公開になっています。<http://www.biwa.ne.jp/~tarumoto>

百年是非，如何評說？4 完  
劉鶚與山西鉅事新論

歐陽榮雪

三

1903年11月21日劉鶚發表《鉅事啓》，對《浙江潮》第六期《劉鐵雲欲賣浙江全省路鉅乎》作出回應。文中說：“山西、河南、浙江三處借款辦鉅皆經僕手，無庸諱也。浙江之鉅經前撫奏明，奉外部飭照新章改定合同，于去冬改照覆奏，奉旨依議，至公非私也；借款辦鉅，商借商還，六十年后全鉅報效國家，若有華人籌得巨款，立刻可以收回，非賣也；浙江事，浙江撫臺奏之，中國事，中國皇上許之，非擅也”。對於強加在他頭上的“私”、“賣”、“擅”三頂帽子逐一答弁，堂堂正正，可對天日。山西的情況也是如此。山西近代化事業主持者是胡聘之，劉鶚貢獻的是“引進外資”的理論闡述與實際策劃。正是這兩個方面，顯示出他超邁時人的亮色。

先說理論上的闡述。劉鶚的“招商引資”論，體現在1897年的《呈晉撫稟》、1903年的《鉅事啓》與1907年的《風潮論》

三篇文章。前一篇是事前針對謀畫者的論證，后兩篇是事后針對輿謗者的反駁，雖可以視作有機的統一體，但用語仍有不同的分寸。

1、正面闡述興辦路鉅，是實現富民強國的經濟基礎。《呈晉撫稟》說：“運路既通，土產之銷場可旺，工藝之進步可速，儻能風氣大開，民富國強，屈指可計也”。

《鉅事啓》說：“緩不濟急，只有開鉅一事見效易而收效速，為當務之首矣”。《風潮論》說：“地產之富如此，人民之衆如此，乃日就窮迫者何哉？農工商業不興，而無業遊民太多故也”。這是劉鶚一貫的主張。

2、興辦路鉅而資金不足，“舉借洋債”即招商引資是可取的手段。當然，資金、技術設備、技術人才皆仰賴洋人，自然要給他們以相當的利益；針對“取我山西之利而洋人所得款三倍于國家，至于地方百姓則毫無利益”的偏狹觀點，《呈晉撫稟》逐一剖分道：

夫利之所屬，當審其在人在地。若在人是賤削我之脂膏，以畀外人，斷不可為者也。若在地，則大有弁矣。在地而為吾人之力之所及者，亦不可為。蓋既為吾人力之所及，今雖不為后猶可為，仍不必畀請外人也，若為吾力之所不可及，又為將來必被他人之所壞者，則不如早自為之為愈也。況我早自為之，固陽為利益歸人，而實則利益歸我者恆數倍于人，更何所顧忌而不為哉？請以其資本用項考之，可以明矣。

今所借資本一千萬兩，大概用凡

三項，一曰造鐵路，二曰建鋁廠，三曰資轉運。造鐵路姑以五百萬計，取之外洋者，僅鐵軌車頭一事而已，所費不過十分之一。其餘大宗買地、土石、石工，實占十分之九，是有四百九十萬散在中國也。建鋁廠姑以二百萬計，機器等件不過百萬，其餘買地、土木、人工，約百餘萬，是銷于中國者又三分之二也。資轉運作三百萬則全在中國，何也？姑以開平比之。開平每日工人為三萬餘名，澤、潞兩府斷不止兩開平也。即以每日六萬人，每人一日工銀一錢五分計之，每日實耗銀一萬兩。一年三百六十萬皆耗于中國也。工人所得工資不能無用也，又將耗于衣食，食則仰給于庖人，衣則仰給予縫工。庖工不能自藝蔬谷也，又轉仰給于農圃；縫工不能自織布帛也，又轉仰給于織人。如是輾轉相資，山西由此分利者不下十餘萬人矣。我國今日之事，患在民失其養。一事而得養者十餘萬人，善政有又過于此者乎？況有鋁必有運鋁之路，年豐谷可以出，歲飢谷可以入，隱相酌劑，利益于農民者，更不知凡幾。<sup>\*49</sup>

“利之所屬”，是引進外資首先要考慮的問題。劉鶚關於“在人”、“在地”的提法，是非常深刻的。他還指出了煤鋁與區域經濟休戚與共的關係：煤鋁開發了，就會推動附近地區的繁榮；區域經濟的繁榮，也會推動和促進煤鋁的發展，二者相輔相成，相得益彰。由于鋁業的興建，不僅工人可得工資，而且圍繞鋁業的各種行業，

如“縫工”、“庖工”、“農圃”、“織人”都會發展起來；“況有鋁必有運鋁之路，年豐谷可以出，歲飢谷可以入，隱相酌劑，利益于農民者，更不知凡幾”，民富國強屈指可計，這是非常有遠見的。《風潮論》則針對後來出現的“排外”、“收回利權”的大言，一針見血地說：“吾之宗旨，惟核實二字而已”。表現在引進外資上，“核實”云者，就是“核則得實”，就是要進行比較：“以用外國款興路鋁與用中國款興路鋁相比較，則用中國款是也。而中國究竟有款與否，其實不可不核也。若中國無款，則路鋁遂不能辦；路鋁不能辦，而生利之源絕矣。以無款而路鋁不辦，與借洋款而路鋁速辦相比較，則借洋款者是矣”。劉鶚還在該文中指出：“國家宜借大宗洋款，多設勸業銀行，倣日本于高麗之辦法，先于各省會開設，次推廣至于各府縣，勸業銀行愈多，則民智之發達愈速”。他還以《日法協約》為例，借世界評論之言曰：“此約成后，外資輸入，必于日本大有利益；然則中國方拒之不暇，何耶？”他大聲說：“敢曰洋款何嘗不可用哉？當籌他日之如何還，勿慮今日之不可借”。在一百年前，真是振聾發聵之論！

3、對於開放與主權關係的論證。《呈晉撫稟》說：“今我山西煤鐵之富甲于天下，西人嘖嘖稱之久矣。必欲閉關自守，將來無知愚民燒一兩處教堂，殺三五名教士，釁端一開，全省鋁路隨和約去矣”。閉關自守，是無法保衛主權的。劉鶚當此之時，倣佛預見到三年后毓賢親手殺死44名傳教士及其所帶來的惡果了。當然要開放，要引進外資，千萬不能忘記“其中猶有絕大

之關鍵存焉，則主權是也”。劉鶚利用當時流行的“兵戰”、“商戰”的說法，道是：“兵力所得者，主權在彼；商力所得者，主權在我，萬國之公例也。然有一國商力所到之處，則別國兵力即不能到。今日亟欲引商權入內者，正恐他日有不幸而為兵權所迫之事，必早杜其而漸之萌，為忠君愛國者當今之急務矣”。也就是說，引進外資，發展經濟，正是為了更好地捍衛國家獨立自主的主權。為了回答後來人們的責難，《鈺事啓》道：“鈺路與租界猶大有別，租界系永遠租與洋人，主權在彼；借款辦路鈺系我借洋人之款，我請洋人辦事，主權在我。若公既謂主權在我，何以工程師、鈺師不能聽我調度？譬如使縫工裁衣，不能任主人之橫下刀剪，其理一也。總之人各有學，學各有宗旨，僕之宗旨在廣引商力以御兵力，俾我得休息數十年以極力整頓工農商務，庶幾自強之勢可成，而國本可立”。《風潮論》則回答難者“子亦欲賣路鈺耶？子亦知借外款則事權全落外人之手乎？目下不辦，將來猶有可辦之日，一落外人手，是華人永無可辦之日矣”時道：“此亦許行之流之說也，非通論也。子一日不衣則寒甚，獨不慮衣權之落縫工手乎？子一日不食則飢甚，獨不慮食權之落庖丁手乎？宮室車馬亦一日不可離者，獨不慮事權之落匠人、輿人之手乎？夫招商局固皆華人之款也，而船之主洋人，總船主亦洋人也，其事權固在洋人手者也。試問何害于招商局？海關固中國國家之海關也，而事權固在赫德手也，一切分關之主皆洋人也，試問又何害于海關？設若允子之意見，招商局總船主換以華人，海關監

督亦換華人，試問能改良耶？抑立見其敗耶？試捫子之良心說之，若云借洋款辦路即為賣路，借洋款辦鈺即為賣鈺，聞岑宮保將借洋款以興廣東實業，然則謂之賣實業可乎？又聞政府將借洋款以興海軍，然則謂之賣海軍可乎？”這裡所說的“借款辦路鈺系我借洋人之款，我請洋人辦事，主權在我”、“兵力所得者，主權在彼；商力所得者，主權在我”，都是清醒者之言。

4、在洋債籌借的操作層面上，《呈晉撫稟》區分了“國家借款”與“官商借款”兩種辦法：一曰國家借款法。“官借官還，以海關作抵，先定合同，奏准之后，洋商即將款項交官，任憑若派何員開辦，一切盈虧洋商概不過問。本利到期，自向海關支付，此與國債無異，所謂全權借款”。但從現實情況出發，海關餘款甚少，恐未必能資山西路鈺之用。二曰官商借款法。“不用海關作抵，亦不用國家作保，但銀錢出入，洋商主之。如此辦法，可行可不行仍決之于官，洋商不能擅主也。若官飭以必不能遵之事，亦只得陳款曲往返互商，不敢顯抗官府，所辦之事定以限期，至期則全產報效國家，盈餘酌提充公，虧折與官無涉”。二者相比，可取的是官商借款法。

劉鶚又指出，此中又有官借、商借之別：“官借則由商務局出名與立合同，商辦則一切須商人轉稟，商稟批駁申飭，無所不可”。比較起來，官借又不如商借：“官未必皆久任，原辦之人既去，後來者雖極精明，難免不受其蒙蔽。若華商業之所在，即身家之所在，慎其始更圖其終，朝夕審計，其利害奧竊知之較詳，故其操縱之術，

必勝官家十倍”。劉鶚還提出，路與鉞又迥有不同：鐵路“修造易則資本輕，人貨多則獲利厚”，可用官借官還、官認盈虧之法辦理；而開鉞“盈虧之數斷難預決”，宜以半權借款、商借商還者為無弊。這種細心區分兩種洋債辦法、路鉞辦法不同之實在情形的態度，是值得稱道的。

《風潮論》則進一步指出，路鉞用洋款要“亦自有別”。路要分裕國之路與保國之路，還要注意“有厚利之路急修，無厚利之路緩修”。至于鉞務，“查有把握者集華款為之，且尤宜任土人自為之，官但保護而已；其無把握者不妨招洋股為之，而華人坐收平分之利息，亦計之得也”。考慮可謂備極周詳。

總之，劉鶚在理論上對引進外資的闡釋，比時人更加深入，也更有愛國情懷，顯示出超凡的膽識。

再說實際上的策劃。引進外資不是紙上談兵，是一種複雜的經濟行為，沒有高明的策劃與操作是不成的。光緒二十三年九月三十日（1897年10月25日），劉鶚以晉豐公司法人代表的身分，與北京福公司法人代表羅沙第簽訂《開辦山西煤鉞合同》與《開辦山西煤鉞借款合同》，光緒二十三年十月二十二日（1897年11月25日）經山西巡撫胡聘之批准，在雙方之間就產生了法律上的權利和義務關係。

商務局函稱，“擬向福公司籌借洋債一千萬兩，章程必須擬妥，利息必須最輕”，這是劉鶚策劃引進外資時的基本出發點，而劉鶚在談判中，始終堅持與外商爭利權的立場，“凡有損我利權者，悉托政府之名以拒之”。但事情不能由一方面意志所決定。

作為外商一方，自然也有以外資控制中國企業的企圖；作為西方列強，甚至是經濟侵略的手段。劉鶚是否真正實現自己的目標，就要看合同的具體內容了。

經濟合同的內容包括合同雙方承擔的權利和義務，主要條款有：

一、標的。標的是合同當事人雙方權利義務所指向的對象，是訂立經濟合同的前提，也是經濟合同必備的主要的基本條款。晉豐公司向福公司籌借洋債，獨自開辦孟縣、平定州與潞安、澤州兩府屬鉞務，于請領憑單后，擇要先行開采，辦有成效，以次逐漸推廣。

二、數量。借洋債一千萬兩，用于購辦一切采鉞應需機器。前提是：福公司即派鉞師前往晉省，查勘該屬各鉞，如鉞師節略利于開采，則借款生效。如所派勘鉞師以此數不敷于用，仍可續借。

三、贏餘處理。“于開鉞贏餘，先提用本官利八厘，又公積一分后，所存餘利，除已提百分之二十五分報效國家外，議定再提百分之二十五分呈歸撫憲報用”。其分配辦法實際上是：國家25%，山西25%，福公司50%；“此系兩國商人自相籌借開辦鉞務，無論盈虧，與中國國家毫不干涉”。“此次開辦鉞務，如有虧折，統歸福公司自理”。將國家甚至晉豐公司都排除在風險責任之外。

四、權限處理。“凡調度鉞務與開采工程，由晉豐公司會同洋商經理；而鉞中執事，議明總以儘用華人為是”。

五、採購處理。“凡開鉞所需料件進口，悉照開平、湖北各鉞現行章程。一經完納海關稅項，一切內地捐輸，概不重征”。

六、履行的期限和方式。“辦鉞之期，限亦六十年。以每鉞開辦之日爲始。限滿鉞場與一切機器皆歸撫憲收回，無須給與福公司分文償補”。

七、“此合同華、法文各繕兩分，彼此收執”。

需要注意的是，合同雖然名曰“籌借洋債”，但既沒有規定還款期限，也沒有規定借款利息，其性質實際上是一種招商引資。福公司以一千萬兩作爲投資，換取孟縣、平定州與潞安、澤州兩府屬鉞六十年中利潤的50%；而其間所有的開支，亦均由福公司支付。

光緒二十四年（1898），翰林院檢討吳式釗、分省補用道程恩培組成豫豐公司，經劉鶚策劃，與北京福公司代理羅沙第改定《河南鉞務合同章程》，議定河南開鉞、制鐵以及轉運各色鉞產章程二十條。由當時總理衙門會同戶部上奏，五月初二日（6月20日）奉朱批依議。其主要精神與山西所訂無異，惟增添了以下各條：

1、在鉞師查勘補充：“應先由鉞師勘定何鄉、何山、何種鉞產，繪圖貼說，稟請河南巡撫查明，果與地方情況無碍，一面咨明總理衙門備案，一面發給凭單，准其開采鉞地，勿稍耽延。如系民產，向業主議明，或租或買，公平給價；如系官產，應照該處田則，加倍納賦”。“勘驗鉞地，或應打鑽掘井、探視鉞苗，應先與地主商明，踏損田禾，酌量賠償。至開鉞以後，或因鉞塌陷，損傷民命房產，應歸福公司撫恤賠償。若定辦一鉞，有占民地，必須會同地方官，或向地主租用，或備價購買。秉公定價，務使兩不受虧，方昭公允。所

開鉞地，無論或租或買，但遇有墳塋祠墓，必須設法繞越，毋得發掘”。“凡于所准鉞地，遇有民人先經開采者，不得侵占。如有原主自願租賣，應由豫豐公司會同福公司秉公給價，但不得稍有抑勒”。“各鉞遇有修路、造橋、開浚河港，或須添造分支鐵道接至干路或河口，以爲轉運該省煤、鐵與各種鉞產出境者，均准福公司稟明河南巡撫自備款項修理，不請公款。其支路應訂章程，屆時另設。凡爲以上所准各事，其須用民地之處，亦照各局已定章程租買，不得少占民地，仍求地方官代爲保護”。

2、管理權限上，有所變更：“各處鉞廠應用華、洋董事各一人，洋董管工程，華董理交涉。一切帳目皆用洋式銀錢出入，洋董經理，華董稽核，各鉞廠總以多用華人爲是。所有薪水，皆由福公司發給”。

“凡調度鉞務與開采工程用人理財各事，由福公司總董經理，豫豐公司總辦會同辦理。其出入數簿，請由河南巡撫隨時派員稽查”。“每處鉞廠總以聯絡官民預息紛爭爲要。應由豫豐公司稟請巡撫，酌派照料委員一人，又設照料紳士一員，由福公司聘請。該員紳薪水，均由福公司籌辦”。

“鉞師、工頭，開辦之始，自應選用洋人，儻日后華人中有精鉞學、諳習工程者，豫豐公司會同福公司派充此項要職。無關重大責成者，皆用華人，尤宜多用河南人，以開風氣”。“鉞丁亦宜多用豫人，其工價應從公酌定。至鉞丁受傷，應如何撫恤；與使用數十年后，應如何酌給養老之費；又平日作工，每日若干時刻各節，統俟開鉞后，再由豫豐公司會同福公司採擇歐美各鉞妥善章程，商請巡撫定奪”。

3、贏餘處理。“所辦鉅務，每年所有鉅產，按照出井之價，值百抽五，作為落地稅，報效中國國家。每年結帳盈餘，先按用本，付官利六厘，再提公積一分，逐年還本，仍隨本減息。俟用本還清，公積即行停止。此外所餘淨利，提二十五分歸中國國家，餘歸福公司自行分給。以後中國他處有用洋款開采煤、鐵鉅者，應請一概做照此章，將所有鉅產值百抽五納稅，以歸畫一”。“公司所開之鉅，不止一處，然各鉅出入與所有盈餘，各歸各鉅清理。如或彼虧此盈，不得以此鉅之盈，補彼鉅之虧，致使國家應得餘利因之少減”。“每至年終，或盈或虧，各分鉅造具清冊，應各請華、洋公正人一名核算無誤。然後刊刻報單，送至豫豐公司察核各鉅盈虧，會造總冊，呈請巡撫，以憑分咨總理衙門、戶部查核。並將報效國家各項一並呈繳”。

4、履行的期限和方式。“福公司所開之鉅，以六十年為限。一經限滿，福公司所辦各鉅，無論新舊，不問盈虧如何，即以全鉅機器及該鉅所有料件並房產基地、河橋、鐵路，凡系在該鉅成本項下置辦之業，全行報效中國國家，不求給價。屆時由豫豐公司稟請河南巡撫派員驗收”。

5、增加開設鉅務鐵路學堂一項：“福公司于各鉅開辦之始，即于鉅山就近開設鉅務鐵路學堂。由地方官紳選取青年穎悟學生二、三十名，延請洋師教授，以備路鉅因材選用。此項經費由福公司籌備”。

6、增加發行股票一項：“豫豐公司所借福公司銀一千萬兩，系約估之數。將來每開一鉅，實需資本若干，由福公司按照所用之數，造印借款股分票，刊刻章程、

定期發賣。如華商于期內願買此種股票者，有則無論多寡，聽其買取”。“華商收買此項鉅務股票，應由豫豐公司按照時價漲落，照章代為收買，或自行買賣，均聽其便。如華紳富商于六十年限內，將某鉅股票收至四分之三，即將該鉅先期收回。由豫豐公司查報，飭交該華商自行經理”。

7、特別聲明：“該鉅為中國自主之產，將來中國有與別國戰爭之事，福公司應聽中國號令，不得接濟別國”。

通過對合同的分析，證明劉鶚引進外資的操作，堅持了平等磋商的準則，在與洋商打交道時不卑不亢，這與同時代一聽“洋”字就無所適從的人，形成了鮮明對照。合同體現了互利的原則。資本就其本性而言，自然是為了謀求最大的利潤。就合同本身而言，福公司所得益處是不言而喻的；但中方仍屬有利可得。最可貴的是，合同體現了國家主權操之于我的原則。其一是規定“辦鉅之期，限亦六十年。以每鉅開辦之日為始。限滿鉅場與一切機器皆歸撫憲收回，無須給與福公司分文償補”。其二是戰時的煤鉅歸屬問題，合同明文規定：“該鉅為中國自主之產，將來中國有與別國戰爭之事，福公司應聽中國號令，不得接濟別國”。

劉鶚在引進外資過程中，扮演了一個雙重的角色。這固然能知己知彼，遊刃有餘，但誠如羅振玉所言，“所以謀國者則是矣，而自謀則疏。萬一幸成，而萋菲日集，利在國，害在君也”。劉鶚山西遭到失敗，而在河南居然成功，引進外資的宿願也得以實現。光緒二十四年二月十六日（1898年3月8日），河南巡撫劉樹棠在奏折中，對

豫豐公司與福公司的合同評價道：“原呈暨合同內聲明，所借之款商借商還，將來如有虧折，歸該公司自理，所得鉅利以百分之三十五分報效朝廷，較之官銀行以餘利百分之二十分報效，實屬加增，且開辦六十年以後，所置辦鉅產業全數報效。送到華洋文一樣合同三分，保款票一紙，章程一分等因。其保款票者，保其所借之款有著也；其合同所議，則自借款以迄開鉅，永遠遵行之信券也；其章程，則皆該公司開辦以後自行之事例。合同、保款票兩項，均已由義大利公使薩爾瓦葛填蓋印押作保。臣詳加察閱，知其借款委實非虛，所擬合同九款，大致亦尚妥協，惟其中稍有隱飾之處。臣以私意揣之，大約洋商出財，華商出力，名為自借洋款，實則以洋商而借洋債。據吳式釗、程恩培亦直言不諱。而臣之愚見尚以為可行者。竊以開鉅非巨款不辦，巨款非集股不成，集洋股甚易，集華股則難；而定章則以集華股為先，集洋股為禁，是以洋商歆于美利，欲染指而無由；華商絀于貲財，願效勞而寡助。近年言鉅利者紛然，成效茫然所睹，職此之由，竊查借洋債與集洋股不同，向為功令所不禁，而以華商而借洋債，與以洋商而借洋債，情形尤為有異。況為洋商自借之債，托名于華商，在華商則有借款之名，並無借款之實，賠累可以無虞；在洋商雖平分開鉅之稅，並不總攬開鉅之權，操縱依然在我。事之便利，計無有過于此者。且即以華商獨辦而論，無論資本或集或借，而開鉅煉鉅之器具，驗鉅化鉅之工程，仍須仰給于外人。是以自有之財辦自有之鉅，利仍不免外溢；況此資本實出自洋商也。

且查合同第三款所開，有該公司執事人等，除西大班鉅師、机師、工程師、化學師外，盡用華人等語，該洋商所有之權，明有限制，實與華商自辦鉅務無甚懸殊。臣先后接見吳式釗、程恩培等，深知其明于大義，志在濟時，必能力顧大局。若准其承辦此項鉅務，當克勝任。現在時局日棘，已准洋商在華設廠制造土貨，此項鉅利尤所覬覦。若不為先發之謀，恐難禁代庖之請。惟事關交涉，微臣未敢擅便，謹照繕該商等議定合同呈請聖裁。如蒙俞允，再由臣將合同加蓋臣衙門關防，分別存發，俾昭信守。並發約執照指派地方，以便開辦”。得旨：著總理各國事務衙門會同戶部議奏<sup>\*50</sup>。劉樹棠，字景韓，光緒二十年任河南巡撫，二十一年十二月兼署東河河道總督，二十四年十月調浙江巡撫。他的奏折對豫豐公司與福公司的合同作了中肯剖析，無異是對劉鶚策劃的全面褒揚。

#### 四

百年后的今天，當我們反觀這段歷史時，學者們對劉鶚大都表示了同情的態度。

王學鈞先生說：“依劉鶚的看法，要得變貧弱而為‘民富國強’，就得興辦工業。要辦工業就得開鉅山筑鐵路。……他認為僅靠官辦或官督商辦流弊很多，應當改良辦法。他的辦法是以民間實業家向外國借款、合股來辦……劉鶚的這個看法，頗有先見之明，但超過了那個時代所能接受的程度”<sup>\*51</sup>。

德國慕尼黑大學屈漢斯先生說：“在治河、辦企業和修鐵路等過程中，劉鶚親身



體驗到保守主義思想路線將使國家日趨衰弱，甚而至于阻礙經濟的發展，因而中國非進行改革不可。但同時他既不是甚至也不可能是一個革命家，因此命中注定他最終為改革和保守兩種勢力所吞噬。然而這並不意味着劉鶚的思想和觀念是完全過時的。有人曾美譽他為引入‘中外合資企業’概念的先驅。而且，具有諷刺意味的是，中國歷來最大的中外合資項目大體上跟劉鶚八十多年前所提議的相同，那就是利用外資發展山西省的煤鐵和修建一條從山西到沿海港口的鐵路” \*52。

謝冕先生說：“上一個世紀末劉鶚關於開采晉煤的設想，很像是今日中國所實行的引進外資以聯合開發的措施。要是這種舉措發生在一百年后的今天，大約不至于形成議論紛紛最后一事無成的結局，不幸的是，此事辦早了一百年！” \*53

劉鶚生活的那個時代把他當作漢奸，是不公正的。一百年前，劉鶚面對西方列強的強勢，最大限度地維護了中國的權益，但却因此受到最不公平的待遇，這對那些一聽到“洋”字就害怕的人無疑是一個巨大的反諷。當我們對此進行反思的時候，最緊迫的已不是摘掉劉鶚頭上的帽子，而是對他招商引資的理論和方略作進一步的總結。對於山西來說，她的鉅藏依然是那樣的豐富，我們該怎樣更好地挖掘這一寶貴的資源呢？

【注】

- 49) 《呈晉撫稟》，《劉鶚及老殘遊記資料》第128-129頁  
 50) 《光緒朝東華錄》總4058頁

晚清小説作者掃描（肆）

武 禧

（零一零）

清河夢庄居士

小説創作：《雙英記》

夢庄居士：姓名無考。約生於1820-1880間。從其《自序》推測早年曾任幕僚，閱歷豐富，熟讀小説。歸隱后根據小説《玉支璣小傳》改寫為《雙英記》並撰序言。（我國以“清河”為地名、河名者衆，此“清河”夢庄居士，無考。又有夢庄居士名王晉卿，生於1893年與此無涉）

《雙英記》有自序一篇，錄於后。

自序：

予出門久歷事多，見情田反復，嘗世味之酸咸，未嘗不嘆人心之狡詐，愈出愈奇。

51) 王學鈞《劉鶚與老殘遊記》，遼寧教育出版社1992年版

52) 屈漢斯《劉鶚的政治思想》，《首屆中國近代文學國際研討會論文集》第218-219頁，百花洲文藝出版社1994年版

53) 謝冕《一部小説的預告——劉鶚論》，《中國文化研究》1998年春之卷

每欲借端一繪世態之炎涼而未果。今彈缺已歸，藏刀不用，晝長無事，正欲覓端作遣。適客來攜一卷小說示予，披而覽之，見其所言，類亦嫉世情之變幻，有所因而言之也。予惜其卷帙散失不全，十存六七，不禁觸動疇昔之懷，見獵喜心，因而補成之。其中雖有更換，然亦因其所因而因之。是述也，非作也。客見而哂曰：“汝本因人成事之流，姑且莫論。但汝盡將書中人之姓名編為詭異，何也？”曰：“是猶《紅樓夢》之甄士隱、賈雨村、渺渺真人、空空大士之意云耳。亦述也，非作也”。客又曰：“汝又指為無稽之外國適時何居？”曰：“子不見《鏡花緣》舍內地而專言外國乎？是宗也，非創也。總而言之，是卷皆竊比也”。

咸豐五年六月中旬夢庄居士撰於十二室南窗下

(此《序》根據陳大康先生《中國近代小說編年》一書過錄)

(零一一)

煙水散人：翁桂(生卒年不詳)

小說創作：《清風亭》、《明月臺》

翁桂(生卒年不詳)：清咸豐年間在世。字凝香。自稱布衣寒士、草野村夫。撰小說署名煙水散人。洞庭東山人，寄跡蕭山。晚年親子不孝，感慨賦詩云“有兒不若無兒快，多兒多女多冤債。與其伯道嘆淒涼，何如散步煙水外”以冀擺脫煩惱。又撰寫《清風亭》、《明月臺》兩書以“慷慨悲歌深寓意，挽回世道植綱常”。《清風亭》一書已不存。《明月臺》一書“咸豐六年(1856)六月”完成於“蕭縣草野書軒南窗

下”。

《明月臺》一書有《明月臺序》、《明月臺自序》、《明月臺批》(筆者未見)。

又醉花樓刊本《玉支璣小傳》一書題“煙水散人編次”。可知翁桂曾讀《玉支璣小傳》並為之編輯刻版梓行。

(筆者未見《清風亭》、《明月臺》任何版本。本文完全依據《中國通俗小說總目提要》撰寫)

(零一二)

云槎外史：顧太清(1799-1877)

小說創作：《紅樓夢影》

顧太清(1799-1877)女。名春，字子春、梅先、梅仙，號太清，自署太清西林春、太清春、西林春，晚號云槎外史。室名天遊閣。滿族，鑲藍旗人。原籍江蘇吳縣。顧氏祖先因從駕有功，賜姓覺羅，曾住於西林，所以姓西林覺羅。后養於顧氏(關於顧太清的家世，學術界有不同見解)。清宗室奕繪(乾隆玄孫)側室。奕繪，字子章，號太素道人，工詩詞，有《子章子集》。奕1839年去世，時顧太清40歲。

顧太清工詞翰，學周邦彥，姜夔，多詠物題畫之作。與滿族納蘭性德先后齊名，有“男中成容若，女中太清春”之譽。有詩集《天遊閣集》、詞集《東海漁歌》，總集名《子春集》。世傳顧太清與龔自珍戀愛關係，待考，不贅。

顧太清以詩詞名世，知其撰寫小說《紅樓夢影》者寥寥。《紅樓夢影》約完成於同治二(1863年)年前后，此時顧太清約64歲，梓行不晚於光緒丁丑(1877)，約在顧太清去世前后。此書《序》作者署名西

湖散人，實爲著有《名媛詩話》，《鴻雪樓初集》的清季才女浙江錢塘沈善寶，號湘佩者。沈善寶是《紅樓夢影》的第一讀者，是促成《紅樓夢影》完成的關鍵人物。她們曾共同組織“秋紅吟社”以詩詞唱和。沈善寶卒於1862年8月，此序寫完后便去世。

《紅樓夢影・序》全文如下：

大凡稗官野史所記新聞而作，是以先取新奇可喜之事立爲主腦，此乃融情入理，以聯脈絡，提一髮則五官四肢俱動。因其情理足信，始能傳世。

《紅樓夢》一書本名《石頭記》，所記絳珠仙草受神瑛侍者灌溉之恩，修成女身，立願託生人世，以淚償之。此極幻之事。而至理深情，獨有千古。作者不惜鏤肝刻腎，讀者得以娛目賞心，幾至家弦戶誦，雅俗共賞。咸知絳珠有償淚之願，無終身之約，淚盡歸仙，再難留戀人間。神瑛無木石之緣，有金石之訂，理當涉世，以了應爲之事，此《紅樓夢》始終之大旨也。海內讀此書者因絳珠負絕世才貌，抱恨夭亡，起而接續前編，各抒己見，爲絳珠吐生前之夙怨，翻薄命之舊案。將紅塵之富貴加碧落之仙姝，死者令其復生，清者揚之使濁。縱然極力舖張，益覺擬不於論，此無他故，與前書本意相悖耳。

今者槎云外史以新編《紅樓夢影》若干回見示，披讀之下，不禁嘆絕。前書一言一動，何殊萬壑千峰，令人應接不暇，此則虛描實寫，傍見側出。回顧前踪，一絲不漏，至於諸人口吻神情，揣摩酷肖。即榮府由否漸亨，一秉循環之理，接續前書，毫無痕跡，真制七襄手也。且善善惡惡，教忠作孝，不失詩人溫柔敦厚本旨。

洵有味乎言之。余聞昔有畫工約畫東西殿壁，一人不知天神眉宇別具神采，非侍從所及，畫畢睹之，愧悔無地。此編之出，倘令海內曾讀《紅樓夢》者見之，有不愧悔如畫工者乎？信夫！前夢后影，並傳不朽。是爲序。

咸豐十一年歲在辛酉其七月之望西湖散人撰



『近代文学研究・留得』第1輯(2005.6)が発行された。通称『拾稗』が第17輯で停刊したあとに改題して創刊したものだ。近代文学研究にまつわる逸聞を掲載する。劉徳隆の個人通信誌であることには変わりがない。学会消息、出版情報、研究者紹介など。中国における研究の状況をうかがうことができ興味深い。

その『近代文学研究・拾稗』全17輯の合訂本が私家版で出た(2005.5)。内容を取捨選択して編集した「拾稗集錦」(『上海楊浦教育学院院刊』2003年第2期)、休刊を宣言したあとの反応を集めた「《拾稗17・休刊号》反饋(選摘)」および「後語」がついている。

本誌第80号の公開は、2006年1月を予定

漢訳アラビアン・ナイト (13)

樽本照雄

魔王は木こりを殺さずに、別の動物に変身させるといふ。これを聞いて、木こりが話を始める。

5-14 説妬 The History of the Envious Man and of Him who was Envied ねたみ深い男とねたまれた男の話

善良な男と、それをねたむ男が隣り合わせて住んでいた。隣人のねたみに耐えかねて、善良な男は引っ越してしまう。僧侶の姿をするばかりか、家に多くの僧侶を住まわせもした。

善良な男は、正式な僧侶になったというわけではない。行ないが僧侶だった。

【繡像小説】乃效噶稜達行。好清静。多营小室。与諸噶稜達共之。(托鉢僧の行ないをまねました。静謐をこのみ、多くの小部屋をいとなんで、托鉢僧たちと共にしたのです) 15丁オ

【タウンゼンド】put on the habit of a dervise, and in a short time he established

a numerous society of dervises. (ダーヴィシユの衣服を身につけまして、短時間のあいだに多数のダーヴィシユの社会をつくったのです) 58頁

【サグデン】put on the habit of a dervise, in order to pass his life more quietly, and made, also, many cells in his house, where he soon established a small community of dervises. (彼の生活をもっと静謐なものとするために、ダーヴィシユの衣服を身につけまして、彼の家に多くの小部屋をつくり、そこでダーヴィシユの小さな社会を形成したのです) 84頁

ダーヴィシユ dervish ということばについての説明は、すでに行なった。英文原作に見える dervise も同様な意味だと推測する。上の文章を比較対照すれば、漢訳は、サグデン版によっていることが理解できるだろう。

善人は、その存在を社会に広く知られるようになる。ねたむ男は、妬みゆえに、わざわざ善人をたずねて行き庭の井戸に彼を突き落としウサを晴らすのである。

井戸の中には、漢訳では「神仙(仙人)」、英文原作タウンゼンド版では「妖精と魔神 peris and genies」、サグデン版でも「妖精と魔神 fairies and genii」が住んでいた。善人は、命を助けられたばかりか、お姫様が病気で、王様からその治療を善人が依頼されること、その病気の治療法までを知ることになる。

漢訳によると、「お姫様は、ディムディムの息子マイムンに好かれて(公主為

亭亭( 魔鬼名 )子墨蒙魔鬼所悦)」(15丁ウ) 病気になった(のちの「説部叢書」版72頁と単行本62頁は、「公主」の「公」を落として印刷している)。タウンゼンド版が、「彼女は、魔神に取りつかれた she is possessed by a genie」(60頁)とだけ表現しているのにくらべれば、サグデン版の「彼女は、ディムディムの息子、恋に落ちた天才マイムウンの力に取りつかれた she is possessed by the power of the genius Maimoun, the son of Dimdim, who he fallen in love with her」(85頁)が、漢訳の底本になっていることに気づく。

マイムウンの呪縛からのがれる方法は、特別な黒猫の尻尾にある白い斑点のなかから7本の毛を抜き、これを燃やすというものだった。

聞いた話の通りに事が進む。王様がお姫様をつれてくる。善人が猫の毛を燃やすと、とりついてきたマイムウンが逃げ出し、姫が正気をとりもどす。

【繡像小説】乃自揭其面巾。張目四顧。(自分でヴェールを掲げると、目をみひらいて周囲をながめました) 16才

【タウンゼンド】she took the veil from her face, and rose up to see where she was, (彼女はヴェールを自分の顔から引きはがすと、立ち上がって周囲をみまわしました) 61頁

【サグデン】The first thing she did was to put her hand to the veil which covered her face, and lift it up to see where she was. (彼女が最初にしたのは、ここがど

こなのかを見るために顔をおおっているヴェールをあげることでした) 86頁

ヴェールをかなぐり捨てるのと、掲げるのとは、違う。細かいようだが、底本をさぐるばあいの材料となる。漢訳は掲げ、タウンゼンド版は捨て、サグデン版が掲げる。ここでも、漢訳はサグデン版によっている。

善人はお姫様と結婚し、王位を継承する。ある日、街中でねたむ男をみかける。善人がなにをしたかということ、なんと昔なじみだからといって財宝をたっぷり贈呈したのである。その財宝の一部は、漢訳では「金貨一千枚(金幣千枚)」(16丁ウ。「説部叢書」版は「枚」を省略する)となっている。タウンゼンド版では「金百枚 one hundred pieces of gold」(62頁)だが、サグデン版は「金一千枚 a thousand pieces of gold」(87頁)として漢訳と一致する。

木こり、すなわち2番目の托鉢僧が、以上の物語をはなしたのには意味がある。ねたむ男を許した善人にならい、魔神が自分を解放することを期待したのだ。ムダだった。木こりは、魔神の魔術によって猿に変身させられた。

2番目の托鉢僧が、猿に変身させられてからの物語になる。

もとは人間の猿だから、思考、行動は人間のままで、ただ、言葉をしゃべることができない。

猿が海辺にたどりつくと船が見える。近くの木を枝を折って浮きかわりにして

船に乗り込む。

当時かの地では、猿は、航海には不吉だと考えられていたらしく、船に乗っていた商人たちは口々に叫びだした。

【繡像小説】或曰。曷以竿擊殺之。或曰。曷射之。或曰。曷拳而投之海。(あるものは、棒でなぐり殺さんかといひますし、またあるものは、射ってしまえといひ、さらに、海に投げ込め、というものもいひます) 17才

【タウンゼンド】On this account they said, " Let us throw him into the sea. " (その理由 [猿は航海には不吉だ] で、「海に放り込め」と言いました) 63頁

【サグデン】" I will kill him, " cried one, " with a blow of this handspike. " " Let me shoot an arrow through his body, " exclaimed another; " and then let us throw him into the sea, " said a third. (「この棒の一撃で殺してやる」とひとりか叫びました。「一矢で射ち殺してやる」と別のひとりが大声で叫びました。「そして海に放り込んでやる」と三人目かいいました) 88頁

漢訳が「竿」としたのは、サグデン版の handspike をもとにしたのだと理解できる。タウンゼンド版には、該当する単語は出てこない。当時の英漢辞典には、handspike の語釈に「楨竿，木挺」を当てている。

猿は船長の足元にとりすがって憐れみを乞ひ、命を助けられることになった。

ある港に到着すると、その国の宰相が亡くなっている。その宰相よりも上手な文字をかく者を宰相の地位に置くという命令が出された。

猿も文字を書こうとしているのを見て、誰もか、猿が紙を破るか海に捨てるかするだろうと思つた。ところが、猿は、文字を書きはじめたのである。

それを見た船長のことばは、こうだ。

【繡像小説】余生平未見智如此猿者。他日行将豢之如子矣。余昔一子。其才乃不当是猿之半。(わしは、これほど賢い猿をこれまで見たことがない。後日、息子のようか飼育してやろう。わしには昔息子が一人いたが、その才能はこの猿の半分もなかつたぞ) 17ウ

【タウンゼンド】なし

【サグデン】I have never seen any ape more clever and ingenious, nor one who seemed so well to understand everything, I declare that I will acknowledge him as my son; I once had one, who did not possess half so much ability as he does. (これほど賢く才能があつて、なんでも知つているように見える猿をわしは見たことがない。わしの養子にすることを断言しよう。わしには、昔息子がいたが、これの能力の半分も持ち合わせなんだぞ) 89頁

こまかな部分で、漢訳とサグデン版が同一であることがわかる。

英文原作が猿を「養子にする I will

acknowledge him as my son」としているにもかかわらず、漢訳では動物を「飼育する(豢)」という言葉を使用する。奚若には、猿を人間の養子にすることに抵抗があったらしい。

ただし、後日「説部叢書」に収録する時、文章を検討したようだ。この部分を「後日、わしは息子にしてやろう(他日余將以為兒)」(76頁)と改訂している。ひとこと紹介しておく。

猿が6種類の書き方で王様を褒めたたえる文章を書くと、猿は王宮へ呼ばれる。

さきほどから、漢訳がサグデン版の英文原作と字句が一致していることを指摘している。

漢訳は、このままサグデン版に拠っているのかと考えれば、これがそうではないので私は困惑するのである。

船から王宮へいたる道中の描写である。

【繡像小説】途中男女老幼来観者。駢街填巷。群嘖嘖奇蘇丹之将相猴也。行之久。始抵蘇丹宮。(道中、老若男女で見物に来るものが、通りにならび横町をうめててしまいました。王様の宰相は猿だぞ、と群をなして騒ぎ立てるのです。しばらく行って、ようやく王宮へたどりつきました) 17ウ

【タウンゼンド】The procession commenced; the harbour, the streets, the public places, windows, terraces, palaces, and houses, were filled with an infinite number of people of all ranks, who flocked from every part of the city to see me; for the

rumour was spread in a moment that the sultan had chosed an ape to be his grand vizier; and after having served for a spectacle to the people, who could not forbear to express their surprise by redoubling their shouts and cries, I arrived at the sultan's palace. (行進がはじまりました。私を見ようと、町のすみずみから集まってきたすべての階層の無数の人々によって、港、通り、広場、窓、テラス、大邸宅そして家々は埋めつくされたのです。王様が猿を宰相に選んだという噂がまたたくまに広がって、高まった彼らの叫び声と大声によってみずからの驚きを表わすことを我慢できない人々のために、見世物にされてから、私は王宮へ到着したのです) 64-65頁

【サグデン】なし

漢訳は、タウンゼンド版の原文を忠実に翻訳はしていない。かいつまんで取り込んだ。サグデン版のように、猿の行進を描写しなくても、物語に影響があるわけではない。省略してもいいような箇所でありながら、わざわざ漢訳をしているということは、拠った英文原作に相当する原文があることを意味する。そうならば、ここはタウンゼンド版にもとづいている。

奚若は、タウンゼンド版とサグデン版の両者を手元に置きながら、漢訳をしているのだろうか。それにしても、両者に存在しない単語、たとえば「タラゴン」があった事実を思い出す。

もう1ヵ所、英文原作と相違するところを指摘しておく。

王様の前に連れてこられた猿は、礼儀にかなった挨拶はする、身の上をのべる文章を書く、酒をのむ、はてはチェスの手合わせを行ない、王様が1勝、猿が2勝した。王様は、おもしろくない。そこで猿が、詩をつくる。

【繡像小説】余又詠詩以献。詩中有二強有力者。終日角闘。入晚則歎若平生云云。蓋隱諷之也。(私は、また詩をよんでささげました。その詩には、ふたりの強者がおり、終日格闘しましたが、夜になると、日常のように仲良くした、などといたしました。遠回しにいったのでごさいます) 18才

【タウンゼンド】I made a stanza to pacify him; in which I told him that two potent armies had been fighting furiously all day, but that they concluded a peace towards the eveing, and passed the remaining part of the night very amicably together upon the field of battle. (私は王様をなぐさめるために詩をつくりました。そのなかで、ふたつの強力な軍隊が、終日猛烈に戦っておりましたが、夕方に和を結び、その夜は戦場で仲良くすごしたことをのべたのでした) 65-66頁

【サグデン】なし

サグデン版に記述のない部分が漢訳になっているのだ。漢訳の底本は、タウンゼンド版となろう。

ここまでくれば、いくらニブイ私であろうと、やはりおかしいと気がつく。

漢訳は、多くの箇所、ある部分はタウンゼンド版により、別の箇所はサグデン版にもとづいている。

この事実は、奚若が、タウンゼンド版とサグデン版をとっかえひっかえ、適当にまぜあわせて漢訳したことを意味するのだろうか。

そんな手間のかかる翻訳を行なうだろうか、という常識的な疑問が生じる。

底本を決めて、それに主として拠りながら漢訳を進める。どうしても必要ならば、別版を参照する。これが、普通の翻訳作業ではなからうか。底本がなければ、その翻訳は支離滅裂なものになりかねない。

いくつかの英文原本を検討したことをふまえ、ここであらためて、漢訳がよった英文原作について考えることにする。





『新編増補清末民初小説目録』の  
『小説海』掲載作品正誤

杜 筆 恩

『小説海』は、第一巻第一号が黄山民を編輯人とし、中國圖書公司和記から中華民國四年一月一日(1915.1.1)に発行された月刊誌である。3年間で合計36号分発行したが、“歐戰縣延紙價昂貴兼以來源缺乏”のため、三巻第十二号がやはり黄山民を編輯人とし、中國圖書公司和記から中華民國六年十二月五日(1917.12.5)に発行されたのを最後に停刊した。

筆者は、最近、同誌を入手、親しく見る機会に恵まれたので、『新編増補清末民初小説目録』と対照し、その誤り等を指摘しておく。

『小説海』1巻11号の発行年月日を「1915.11.11」とするが、実際は「1915.11.1」。以下の作品を訂正

d0024 大錯 f0564 富貴黨  
j0132 記乾隆乙卯鬧場事  
j1181 軍人之妻 t0458 銅駝恨  
w0607 吳士淇 x0618 孝婦  
y0127 豔鬼魂 y0297 夜航船  
y0975 櫻花夢

『小説海』2巻1号の発行年月日を「1916.1.1」とするが、奥付・表紙・目次には記載無(東洋文庫蔵本も同)。他の例に倣い、「[1916.1.1]」とすべきであろう。以下の作品を訂正

b0166 白下慘聞 k0320 鄭生  
l0458 李道士 p0236 菩薩禍  
q0725 情迷 q0766 情天不老  
s1407 宋小環 x0451 蕭牆淚  
x0588 小學生之姊 y0694 倚閭之思  
y1002\* 鷹梯小豪傑 z0788 墜泥花

『小説海』2巻2号の発行年月日を「1916.2.1」とするが、奥付・表紙・目次には記載無(東洋文庫蔵本も同)。他の例に倣い、「[1916.2.1]」とすべきであろう。以下の作品を訂正

b0551 病國旅行記 h0531 黑衣孃  
j0001 雞 k0326 割臂譚  
l0440 李阿虎 l1008 陸乞  
m0713 閩風小記 q0088 奇盜案  
x0451 蕭牆淚 z0679 朱二  
z0884 自由鏡

『小説海』2巻3号の発行年月日を「1916.3.1」とするが、奥付・表紙・目次には記載無(東洋文庫蔵本も同)。他の例に倣い、「[1916.3.1]」とすべきであろう。以下の作品を訂正

a0087 哀絃新語 b0175 白衣庵  
b0230 百年后之上海 b0668 跛醫生  
c0283 沈淚花 d0251 道爺  
f0358\* 瘋奇 q0478 秦武臣  
s0130 三死不死 s1073 雙孤留學記  
y0124 燕東三俠

『小説海』2巻10号の発行年月日を「1916.10.1」とするが、実際の奥付は「中華民國五年十一月一日初版發行」。表紙・目次には記載無(東洋文庫蔵本も同)。「[1916.10.1]」(奥付は1916.11<sup>27</sup>.1)」とすべきであろう。以下の作品を訂正

b0347 北極出險記 b0773 不貪爲寶  
c0437 離踪 h1024 虎父犬子  
l0483 李士偉 q0648 情場與戰地

# 本 社 徵 文

本雜誌月出一冊、內分短篇  
 小說雜著詩詞及小品文字、  
**應有盡有**出版以來、頗  
 承社會稱許、惟本社同人學  
 識有限、海內宏達、若以譯  
**著見惠**無任歡迎、(潤  
 格每千字自一元至三元)  
 惟原稿在三千字以內者、用  
 否概不壁還、特此奉告、  
 ◎◎小説海社謹啓  
 海(一)

THE SHORT STORY MAGAZINE (Issued Monthly)									
表	日	價	售	廣	外	郵	定	項	不
普通	每行	五	角	特等	全面	四	元	現款	中華民國五年
上等	全面	三	元	第一	全面	三	元	及兌票	一月一日初版發行
中等	全面	二	元	第二	全面	二	元	費	編輯者 黃山
下等	全面	一	元	第三	全面	一	元	須	發行者 中國圖書公司
每行	五	角	特等	第四	全面	四	角	先	印刷所 中國圖書公司
每行	五	角	第一	第五	全面	三	角	惠	分售處 上海四馬路中法大藥房對面
每行	五	角	第二	第六	全面	二	角		中國圖書公司
每行	五	角	第三	第七	全面	一	角		各省支店
每行	五	角	第四	第八	全面	八	分		
每行	五	角	第五	第九	全面	六	分		
每行	五	角	第六	第十	全面	四	分		
每行	五	角	第七	第十一	全面	二	分		
每行	五	角	第八	第十二	全面	一	分		
每行	五	角	第九	第十三	全面	八	分		
每行	五	角	第十	第十四	全面	六	分		
每行	五	角	第十一	第十五	全面	四	分		
每行	五	角	第十二	第十六	全面	二	分		
每行	五	角	第十三	第十七	全面	一	分		
每行	五	角	第十四	第十八	全面	八	分		
每行	五	角	第十五	第十九	全面	六	分		
每行	五	角	第十六	第二十	全面	四	分		
每行	五	角	第十七	第二十一	全面	二	分		
每行	五	角	第十八	第二十二	全面	一	分		
每行	五	角	第十九	第二十三	全面	八	分		
每行	五	角	第二十	第二十四	全面	六	分		
每行	五	角	第二十一	第二十五	全面	四	分		
每行	五	角	第二十二	第二十六	全面	二	分		
每行	五	角	第二十三	第二十七	全面	一	分		
每行	五	角	第二十四	第二十八	全面	八	分		
每行	五	角	第二十五	第二十九	全面	六	分		
每行	五	角	第二十六	第三十	全面	四	分		
每行	五	角	第二十七	第三十一	全面	二	分		
每行	五	角	第二十八	第三十二	全面	一	分		
每行	五	角	第二十九	第三十三	全面	八	分		
每行	五	角	第三十	第三十四	全面	六	分		
每行	五	角	第三十一	第三十五	全面	四	分		
每行	五	角	第三十二	第三十六	全面	二	分		
每行	五	角	第三十三	第三十七	全面	一	分		
每行	五	角	第三十四	第三十八	全面	八	分		
每行	五	角	第三十五	第三十九	全面	六	分		
每行	五	角	第三十六	第四十	全面	四	分		
每行	五	角	第三十七	第四十一	全面	二	分		
每行	五	角	第三十八	第四十二	全面	一	分		
每行	五	角	第三十九	第四十三	全面	八	分		
每行	五	角	第四十	第四十四	全面	六	分		
每行	五	角	第四十一	第四十五	全面	四	分		
每行	五	角	第四十二	第四十六	全面	二	分		
每行	五	角	第四十三	第四十七	全面	一	分		
每行	五	角	第四十四	第四十八	全面	八	分		
每行	五	角	第四十五	第四十九	全面	六	分		
每行	五	角	第四十六	第五十	全面	四	分		
每行	五	角	第四十七	第五十一	全面	二	分		
每行	五	角	第四十八	第五十二	全面	一	分		
每行	五	角	第四十九	第五十三	全面	八	分		
每行	五	角	第五十	第五十四	全面	六	分		
每行	五	角	第五十一	第五十五	全面	四	分		
每行	五	角	第五十二	第五十六	全面	二	分		
每行	五	角	第五十三	第五十七	全面	一	分		
每行	五	角	第五十四	第五十八	全面	八	分		
每行	五	角	第五十五	第五十九	全面	六	分		
每行	五	角	第五十六	第六十	全面	四	分		
每行	五	角	第五十七	第六十一	全面	二	分		
每行	五	角	第五十八	第六十二	全面	一	分		
每行	五	角	第五十九	第六十三	全面	八	分		
每行	五	角	第六十	第六十四	全面	六	分		
每行	五	角	第六十一	第六十五	全面	四	分		
每行	五	角	第六十二	第六十六	全面	二	分		
每行	五	角	第六十三	第六十七	全面	一	分		
每行	五	角	第六十四	第六十八	全面	八	分		
每行	五	角	第六十五	第六十九	全面	六	分		
每行	五	角	第六十六	第七十	全面	四	分		
每行	五	角	第六十七	第七十一	全面	二	分		
每行	五	角	第六十八	第七十二	全面	一	分		
每行	五	角	第六十九	第七十三	全面	八	分		
每行	五	角	第七十	第七十四	全面	六	分		
每行	五	角	第七十一	第七十五	全面	四	分		
每行	五	角	第七十二	第七十六	全面	二	分		
每行	五	角	第七十三	第七十七	全面	一	分		
每行	五	角	第七十四	第七十八	全面	八	分		
每行	五	角	第七十五	第七十九	全面	六	分		
每行	五	角	第七十六	第八十	全面	四	分		
每行	五	角	第七十七	第八十一	全面	二	分		
每行	五	角	第七十八	第八十二	全面	一	分		
每行	五	角	第七十九	第八十三	全面	八	分		
每行	五	角	第八十	第八十四	全面	六	分		
每行	五	角	第八十一	第八十五	全面	四	分		
每行	五	角	第八十二	第八十六	全面	二	分		
每行	五	角	第八十三	第八十七	全面	一	分		
每行	五	角	第八十四	第八十八	全面	八	分		
每行	五	角	第八十五	第八十九	全面	六	分		
每行	五	角	第八十六	第九十	全面	四	分		
每行	五	角	第八十七	第九十一	全面	二	分		
每行	五	角	第八十八	第九十二	全面	一	分		
每行	五	角	第八十九	第九十三	全面	八	分		
每行	五	角	第九十	第九十四	全面	六	分		
每行	五	角	第九十一	第九十五	全面	四	分		
每行	五	角	第九十二	第九十六	全面	二	分		
每行	五	角	第九十三	第九十七	全面	一	分		
每行	五	角	第九十四	第九十八	全面	八	分		
每行	五	角	第九十五	第九十九	全面	六	分		
每行	五	角	第九十六	第一百	全面	四	分		
每行	五	角	第九十七	第一百零一	全面	二	分		
每行	五	角	第九十八	第一百零二	全面	一	分		
每行	五	角	第九十九	第一百零三	全面	八	分		
每行	五	角	第一百	第一百零四	全面	六	分		
每行	五	角	第一百零一	第一百零五	全面	四	分		
每行	五	角	第一百零二	第一百零六	全面	二	分		
每行	五	角	第一百零三	第一百零七	全面	一	分		
每行	五	角	第一百零四	第一百零八	全面	八	分		
每行	五	角	第一百零五	第一百零九	全面	六	分		
每行	五	角	第一百零六	第一百一十	全面	四	分		
每行	五	角	第一百零七	第一百一十一	全面	二	分		
每行	五	角	第一百零八	第一百一十二	全面	一	分		
每行	五	角	第一百零九	第一百一十三	全面	八	分		
每行	五	角	第一百一十	第一百一十四	全面	六	分		
每行	五	角	第一百一十一	第一百一十五	全面	四	分		
每行	五	角	第一百一十二	第一百一十六	全面	二	分		
每行	五	角	第一百一十三	第一百一十七	全面	一	分		
每行	五	角	第一百一十四	第一百一十八	全面	八	分		
每行	五	角	第一百一十五	第一百一十九	全面	六	分		
每行	五	角	第一百一十六	第一百二十	全面	四	分		
每行	五	角	第一百一十七	第一百二十一	全面	二	分		
每行	五	角	第一百一十八	第一百二十二	全面	一	分		
每行	五	角	第一百一十九	第一百二十三	全面	八	分		
每行	五	角	第一百二十	第一百二十四	全面	六	分		
每行	五	角	第一百二十一	第一百二十五	全面	四	分		
每行	五	角	第一百二十二	第一百二十六	全面	二	分		
每行	五	角	第一百二十三	第一百二十七	全面	一	分		
每行	五	角	第一百二十四	第一百二十八	全面	八	分		
每行	五	角	第一百二十五	第一百二十九	全面	六	分		
每行	五	角	第一百二十六	第一百三十	全面	四	分		
每行	五	角	第一百二十七	第一百三十一	全面	二	分		
每行	五	角	第一百二十八	第一百三十二	全面	一	分		
每行	五	角	第一百二十九	第一百三十三	全面	八	分		
每行	五	角	第一百三十	第一百三十四	全面	六	分		
每行	五	角	第一百三十一	第一百三十五	全面	四	分		
每行	五	角	第一百三十二	第一百三十六	全面	二	分		
每行	五	角	第一百三十三	第一百三十七	全面	一	分		
每行	五	角	第一百三十四	第一百三十八	全面	八	分		
每行	五	角	第一百三十五	第一百三十九	全面	六	分		
每行	五	角	第一百三十六	第一百四十	全面	四	分		
每行	五	角	第一百三十七	第一百四十一	全面	二	分		
每行	五	角	第一百三十八	第一百四十二	全面	一	分		
每行	五	角	第一百三十九	第一百四十三	全面	八	分		
每行	五	角	第一百四十	第一百四十四	全面	六	分		
每行	五	角	第一百四十一	第一百四十五	全面	四	分		
每行	五	角	第一百四十二	第一百四十六	全面	二	分		
每行	五	角	第一百四十三	第一百四十七	全面	一	分		
每行	五	角	第一百四十四	第一百四十八	全面	八	分		
每行	五	角	第一百四十五	第一百四十九	全面	六	分		
每行	五	角	第一百四十六	第一百五十	全面	四	分		
每行	五	角	第一百四十七	第一百五十一	全面	二	分		
每行	五	角	第一百四十八	第一百五十二	全面	一	分		
每行	五	角	第一百四十九	第一百五十三	全面	八	分		
每行	五	角	第一百五十	第一百五十四					

d0109 大士庵 『小説海』3巻5号

\* 作品名は「大士菴」

\* 作者名は「无悔」か「无悔」

d0331 地下都會與海底森林 確庵 『小説海』2巻4号

\* 作者名は「確菴」

j0400 江翁 無悔 『小説海』2巻5号

\* 作者名は「无悔」か「无悔」

f0230 斐林小劫 『小説海』2巻9号

\* 本文題は「斐林小劫」( 目録題が「斐林小劫」)

j1122 鶻娘 『小説海』3巻4号

\* 作品名は「鶻嬢」

f0358\* 瘋奇 『小説海』2巻3-4号

\* 「3章」を補う

k0156 空屋 『小説海』1巻7号

\* 創作ではなく、翻訳。ホームズもの。原作 ARTHUR CONAN DOYLE “ The Adventure of the Empty House ” 1903.10

g0088 閻臣失踪記 『小説海』1巻5号

\* 異体字：もとは「閻臣失蹤記」

l1118 緑井藏圖記 『小説海』3巻7-12号

\* 「12回」を補う

g0341 故宮艷跡 『小説海』1巻1号

\* 作品名は「故宮豔蹟」

m0728 名馬 『小説海』1巻10号

\* 創作ではなく、翻訳。ホームズもの。原作 ARTHUR CONAN DOYLE “ The Adventure of the Silver Blaze ” 1892.12。但し、HOLMESを「克萊達博士」、WATSONを「奈葛柴醫學士」とする

h0050 海綿 『小説海』2巻11号

\* 創作ではなく、翻訳。ホームズもの。原作 ARTHUR CONAN DOYLE “ The Man with the Twisted Lip ” 1891.12

h0424 黒籍魂 『小説海』1巻1-6号

\* 「8回」を補う

m0783 模範郷 『小説海』1巻7-12号

\* 「12章」を補う

h0531 黒衣娘 『小説海』2巻2号

\* 作品名は「黒衣嬢」

m0842 墨女被竊案 『小説海』3巻9-12号

1917.9.5-12.5

\* 連載は3巻10号まで。「3巻9-10号 1917.9.5-10.5」とする。作中に「聶格卡忒」が出てくるので、NICK CARTERものである

h1380 黄殿撰軼聞 『小説海』2巻8号

\* 作品名は「黄殿撰軼事」

h1444 黄金箒 『小説海』3巻3-6号

\* 「10回」を補う

n0021\* 拿雲手 『小説海』3巻1-8期

\* 「22章」を補う。掲載誌は「3巻1-8号」。異体字：もとは「拏雲手」

h1651\* 火底蓮 『小説海』3巻9号

\* 「5章」を補う

n0153\* 廿六人( 短篇小説 ) 『小説海』2巻5号

\* 「( 短篇小説 ) 」はない

j0132 記乾隆乙卯鬧場事 無悔 『小説海』1巻11号

- n0321 孽哉死矣 無悔 『小説海』3巻6号  
\* 作者名は「无悔」
- n0566 女偵探( 短篇小説 ) 『小説海』3巻1号  
\* 「( 短篇小説 ) 」はない
- o0046 歐州政界之女傑 『小説海』3巻9号  
\* 作品名は「歐洲政界之女傑」
- p0058 蓬萊仙館 『小説海』1巻10号  
\* 作品名は「蓬萊仙館」
- q0349 強項令 無悔 『小説海』3巻6号  
\* 作者名は「无悔」
- q0648 情場與戰地 『小説海』2巻8-10号  
\* 「6章」を補う
- q0840 情獄 『小説海』3巻11-12号  
\* 「8章」を補う
- r0083 日光殺人案( 短篇小説 ) 『小説海』2巻12号  
\* 「( 短篇小説 ) 」はない
- s0971 書捕役洪謀事 『小説海』2巻5号  
\* 作品名は「書捕役洪某事」
- t0084 罈子王 『小説海』1巻3号  
\* 異体字：もとは「罈子王」
- t0427 通防紀概 無悔 『小説海』3巻3号  
\* 作者名は「无悔」か「无悔」
- w0582\* 無人島 『小説海』1巻9-12号  
\* 「32回」を補う
- x0121 鬨牆余痛 『小説海』3巻7号  
\* 異体字：もとは「鬨牆餘痛」
- x0451 蕭牆淚 『小説海』2巻1-2号  
\* 「8章」を補う。異体字：もとは「蕭牆淚」
- x0588 小学生之姉 『小説海』2巻1号  
\* 異体字：もとは「小學生之姉」
- x1276 兄弟偵探 『小説海』2巻12号  
\* 「6章」を補う
- x1308 繡巾縁 天臥生 『小説海』3巻1-2号  
\* 作者名について、目録及び3巻2号作品名下には「謝直君」とあるので、注記すべきであろう
- y0146 豔聞掇佚 『小説海』2巻11-12号  
\* 「8章」を補う
- y0187 陽歴星命 『小説海』3巻10号  
\* 本文題は「陽曆星命」( 目録題が「陽歴星命」)
- y0307 夜宿東岳行宮紀事 『小説海』3巻3号  
\* 異体字：もとは「夜宿東嶽行宮紀事」
- y0630 一掌血 王梅癩 『小説海』3巻8号  
\* 本文題下の作者名は「黄梅癩」( 目録が「王梅癩」)
- y0964 英國人 洪琛 『小説海』3巻10号  
\* 作者名は「洪深」
- y1002\* 鷹梯小豪傑 『小説海』2巻1-5号  
\* 「全15章」( 「第十六章」までであるが、「第十五章」は存在しない ) を補う
- y1369 玉璫緘札 『小説海』2巻7号  
\* 本文題は「玉璫緘札」( 目録題が「玉璫緘札」)
- y1392 玉華慘史 『小説海』2巻6-10号  
\* 「16章」を補う

y1702 雲夢縁 『小説海』2巻5-7号  
\* 「20章」を補う

z0061 賊歴 『小説海』3巻4号  
\* 作品名は「賊曆」

z0961 最後之跳舞(短篇小説) 『小説海』  
3巻4号  
\* 「(短篇小説)」はない



### 清末小説から

神田一三 魯迅《造人術》の原作(許昌福訳)『魯迅研究月刊』2001年第9期2001.9.20

魯迅《造人術》の原作・補遺  
英文原作の秘密(許昌福訳)『魯迅研究月刊』2002年第1期2002.1.20

中島長文 「哀塵」一篇は魯迅の訳する所に非ざるを論じ兼ねて「造人術」に及ぶ『飄風』第38号2005.3.28

陳 夢熊 關於魯迅訳述《哀塵》、《造人術》の考説『《魯迅全集》中的人和事 魯迅佚文佚事考釈』上海社会科学院出版社2004.8

知堂老人談《哀塵》、《造人術》  
の三封信 同上

魯迅《歐美名家短篇小説叢刻》  
評語の考説 同上

戈 宝権 關於魯迅最早の兩篇訳文  
《哀塵》、《造人術》(陳夢熊)『《魯迅全集》中的人和事 魯迅佚文佚事考釈』上海社会科学院出版社2004.8

王 爾齡 魯迅編訳《造人術》の一二補証(陳夢熊)『《魯迅全集》中的人和事 魯迅佚文佚事考釈』上海社会科学院出版社2004.8

張 志強 『20世紀中国的出版研究』南寧・広西教育出版社2004.1

新井清司 ドイル書誌調査余談(21)『本を選ぶ』第219号2003.8.20

葛 桂録 迭更斯:一個“聖誕老人”的中国之行『他者的眼光 中英文学關係論稿』銀川・寧夏人民教育出版社2003.12

羅 選民 外国文学翻譯在中国:二十世紀的回眸(代序)(羅選民主編)『外国文学翻譯在中国』合肥・安徽文藝出版社2003.12

謝天振、查明建(主編)『中国現代翻譯文学史(1898-1949)』上海外語教育出版社2004.9

郭 延礼 『20世紀中国近代文学研究學術史』南昌・江西高校出版社2004.12

楊 国明 『晚清小説与社会經濟轉型』上海・東方出版中心2005.1

陳 玉堂 (『中国近現代人物名号大辞典(全編増訂本)』全編増訂本略言『中国近現代人物名号大辞典(全編増訂本)』杭州・浙江古籍出版社2005.1

黄 錦珠 『晚清小説中の「新女性」研究』台湾・文津出版社有限公司2005.1

劉 德枢 劉鄂倡修津鎮鐵路始末『文史雜誌』2005年第1期(總第115期)

2005.1.5

李家駒 『商務印書館与近代知識文化  
の伝播』北京・商務印書館2005.2  
虎 闈 弄堂博士趙荅狂 『蔵書家』第10  
輯2005.2

宋 莉華 第一部伝教士中文小説の流伝  
与影響 米怜《張遠兩友相論》  
論略 『文学遺産』2005年第2期20  
05.3.15

范 伯群 黒幕征答・黒幕小説・掲黒運  
動 『文学評論』2005年第2期2005.  
3.15 (『清末小説』第27号2004と  
同文)

李 喬 官場流行《官場現形記》『清代  
官場図記』北京・中華書局2005.4

老九(劉德隆) (編集) 『近代文学研究  
・拾稗合集』私家版2005.5

陳 少華 論中国現代文学父子關係中的  
“篡弑”主題 『文学評論』2005  
年第3期2005.5.15

中村みどり 『留東外史』と「沈倫」  
表裏する「性」の物語 『中国  
文芸研究会会報』第284号2005.2.  
26

『明清小説研究』2004年第4期

2004発行月日記

《新小説》与清末的“政治小説”(附録:

清末民初“政治小説”篇目)

.....于潤琦

蔡元培与清末政治小説 .....侯 敏

『明清小説研究』2005年第1期

2005発行月日記

欧陽鉅源与李伯元の兩度合作.....王学鈞

晚清小説家瑣考 .....朱德慈

晚清報刊中的小説宝藏 以《神州日報》

為個案 .....劉永文、吳瀟

試析晚清劍俠小説中劍俠形象的轉變

.....張樂林

『出版史料』2005年第1期

2005.3.25

阿英与周紹良的學術往来.....白化文

晚清時期伝教士在福建的出版活動

.....張雷峰

僅出一期的《俳優雜誌》.....柳和城

『出版史料』2005年第2期

2005.6.25

安徒生長篇小説《即興詩人》第一個中訳

本後記 .....劉季星

鴛鴦蝴蝶派与民国出版業.....周利栄

茅盾与《小説月報》改革.....李 輝

在哈爾濱出版的《小説月報》.....郭浩帆

樽本照雄著

清末小説研究資料叢書 9

# 清末小説研究論

B5判 417頁 限定150部 定価: 5,250円